

HP Connect-It

ソフトウェアバージョン : 3.81

クイックスタート



法的制限事項

Copyright

© Copyright 1994-2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

限定保証条項

機密コンピュータソフトウェア。

所有、使用、または複製するには、HP からの有効なライセンスが必要です。

FAR 12.211 および 12.212 準拠。商用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアマニュアル、技術データは、ベンダの標準商用ライセンスに基づき、米国政府にライセンス供与されています。

保証

HP 製品およびサービスに対する保証は、当該製品およびサービスに付属の明示的保証規定に記載されているものに限られます。

本書のいかなる内容も当該保証に新たに保証を追加するものではありません。

HP は、本書中の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負いかねます。

ここに記載されている情報は、予告なしに変更されることがあります。

商標

- Adobe®, Adobe Photoshop® and Acrobat® are trademarks of Adobe Systems Incorporated.
- Corel® and Corel logo® are trademarks or registered trademarks of Corel Corporation or Corel Corporation Limited.
- Java™ is a US trademark of Sun Microsystems, Inc.
- Linux is a U.S. registered trademark of Linus Torvalds
- Microsoft®, Windows®, Windows NT® and Windows® XP are U.S. registered trademarks of Microsoft Corporation.
- Oracle® is a registered US trademark of Oracle Corporation, Redwood City, California.
- UNIX® is a registered trademark of The Open Group.

目次

はじめに	5
Connect-Itの使用目的	5
Connect-Itの対象ユーザ	5
このガイドの対象読者	5
このガイドの使用方法	6
1. ユーザインタフェースのクイックビュー	9
Scenario builder	10
コネクタ	10
モニタ	11
オプション	11
2. シナリオ要素の定義	13
ソースコネクタ	13
ターゲットコネクタ	14
マッピング	14
3. シナリオ要素の設定	15
生成用ドキュメントタイプの定義	15
取り込み用ドキュメントタイプの定義	16
ドキュメントタイプのマッピングの定義	17
マッピングの編集	17

管理モニタの定義	18
4. シナリオの起動	21
シナリオの起動	21
スケジューラの起動	22
Windowsサービスとしてシナリオを起動	22
Webコンソールでシナリオを起動	22
5. シナリオの追跡	25
ログの使用	25
シナリオのデバッグ	26
索引	29

はじめに

Connect-Itの使用目的

Connect-Itは、異なるアプリケーション間でデータのやり取りを行う統合プラットフォームです。

Connect-Itの対象ユーザ

Connect-Itは、企業内の異種 of アプリケーション間の統合を担当するIT技術者を対象としています。

このガイドの対象読者

このガイドでは、アプリケーションのメイン機能とその実施方法を学ぶ必要がある方すべてを対象として書かれています。



注意:

このガイドでは、提示された要素それぞれについて可能な設定のすべてを述べてはいません。

特定の要素についての詳細は、このガイドで提示している各マニュアルを参照してください。

このガイドの使用方法

『クイックスタートガイド』は、シナリオの実行（作成から実行まで）についてのそれぞれのステップを確認する際に使用します。

「ユーザインタフェースのクイックビュー」の章

このチャプタでは、アプリケーションのグラフィカルインタフェースの主要要素について、説明します。

「シナリオ要素の定義」の章

この章では、シナリオを校正する要素とその実行方法を説明します。

「シナリオ要素の設定」の章

この章ではシナリオの主要素の設定方法を説明します。


「シナリオの起動」の章

この章ではシナリオのドキュメントの生成を起動するためのいくつかのアプローチを提示します。

本ガイドで使用する表記法

本ガイドで使用する表記法の一覧を以下に示します。

表記法	説明
JavaScriptコード	コードまたはコマンドの例。
...	省略したコードまたはコマンド部分。
注意:	追加情報。
追加情報...	
重要項目:	ユーザにとって重要な情報。
注意...	

表記法	説明
	ドラッグドロップアクション。
オブジェクト	Connect-It インタフェース：メニュー、メニューエントリ、タブ、ボタン。

また次のような表記も使用しています。

- 決められた順で実行しなければならない手順は、次のように番号付きのリストで表示します。例えば、
 - 1 手順1
 - 2 手順2
 - 3 手順3および最終手順
- すべての図と表は、章と出現する順番に応じて番号が付けられます。例えば、第2章の4番目の表のタイトルは**表2-4**が先頭に付きます。

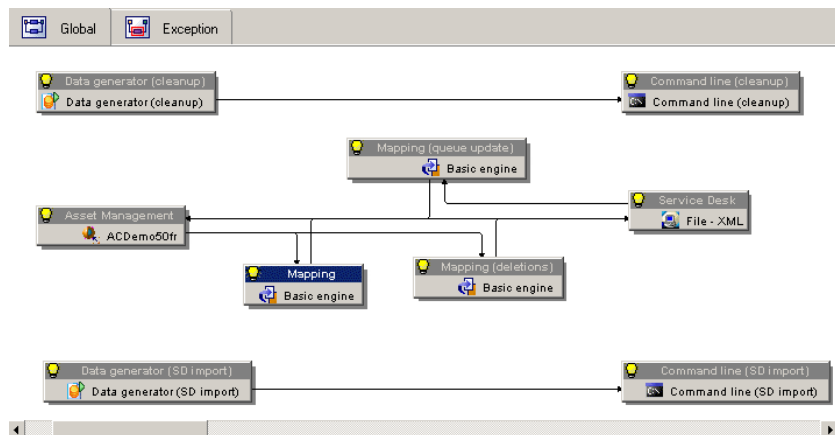
1 ユーザインタフェースのクイックビュー

Connect-Itのメインコンポーネントは次の通りです。

- Scenario builder
 - ▶ Connect-It - 『ユーザガイド』 「Ergonomics」 「Scenario builder」
- コネクタ
 - ▶ Connect-It - 『ユーザガイド』 「基本概念」
- モニタ
 - ▶ Connect-It - 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」

Scenario builder

Scenario builderはコネクタを置く作業枠です。



コネクタ

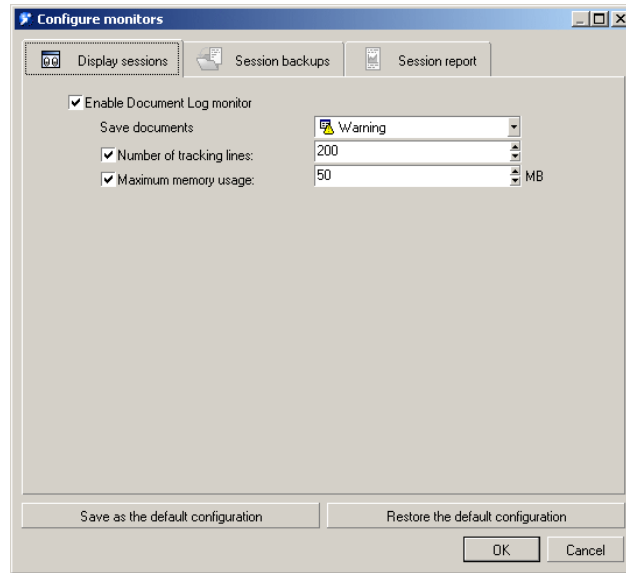
コネクタは、アプリケーションデータベース、または他のデータフォーマット (.xmlファイル、プロトコルなど) に接続するためのコンポーネントです。



▶ Connect-It - コネクタ

モニタ

モニタはシナリオと関連付けたモニタリング機能を実行します。データ処理を追跡したり、データ処理の改善に利用できる情報(統計、エラーログなど)の提供にも使われます。



▶ Connect-It- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」

オプション

Edit/ Options...メニューで使用できるオプションは次の通りです。

- Connect-Itコンポーネント
- アプリケーション



ユーザが直接設定する値がデータの処理方法に影響を与えます。

- ▶ **Connect-It** - 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」
「シナリオオプションの編集」

2 シナリオ要素の定義

各シナリオコンポーネントを設定します。
通常、シナリオは以下の要素から構成されています。

- ソースコネクタ
- マッピングボックス
- ターゲットコネクタ

ソースコネクタ



- 1 スクリーンショットにあるようにドラッグアンドドロップします。
connector configurationウィザードが自動的に起動します。

コネクタを設定する

本番環境で操作するには、各コネクタの設定が必要です。

- ▶ Connect-It - 『コネクタガイド』 「コネクタの設定」

ターゲットコネクタ



- 1 スクリーンショットにあるようにドラッグアンドドロップします。
connector configurationウィザードが自動的に起動します。

コネクタを設定する

本番環境で操作するには、各コネクタの設定が必要です。

- ▶ Connect-It - 『コネクタガイド』 「コネクタの設定」

マッピング



- 1 図に示すようにソースコネクタを選択します。
- 2 2番目のコネクタをドラッグアンドドロップします。
マッピングボックスが自動的に作成されます。

マッピングボックスを設定する

マッピングボックスは独立した設定可能なコネクタです。

- ▶ Connect-It 『ユーザガイド』 「ドキュメントタイプのマッピングの定義」 「マッピングボックス」

3 シナリオ要素の設定

シナリオで使用される各要素の動作は定義する必要があります。
定義する項目は、以下の通りです。

- 生成用ドキュメントタイプ
- 取り込み用ドキュメントタイプ
- 各ドキュメントタイプのマッピング

生成用ドキュメントタイプの定義

生成用ドキュメントタイプは、主にデータベーススキーマを解釈するドキュメントです。

ドキュメントタイプは、階層で並べられた複数のフィールドを含んでいます。このフィールドとは、ルート、フィールド、構造（複数のフィールド）、コレクション（構造と複数のフィールド）です。

コネクタによる生成用または取り込み用のドキュメントタイプを生成するには、以下の操作を行います。

- コネクタによって発行されたドキュメントタイプの中から、1つのドキュメントタイプを選択する。
- 選択されたドキュメントタイプのフィールドの中からフィールドを選択する。

生成用ドキュメントタイプを生成するには：

- 1 図で示すようにドキュメントフィールドをドラッグアンドドロップします。

必要なフィールドのみを選択します。



- 2 ドキュメントタイプの生成用に選択された要素のみが右のコラムに表示されます。



- 3 ドキュメントタイプの生成を検証します。選択されたコネクタの**Document types**タブに表示されます。

▶ **Connect-It** – 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「生成用または取り込み用ドキュメントタイプの定義」

取り込み用ドキュメントタイプの定義

取り込み用ドキュメントタイプは、ターゲットコネクタによって取り込まれるドキュメントです。このドキュメントは、階層で並べられた複数のフィールドを含んでいます。このフィールドとは、ルート、フィールド、構造（複数のフィールド）、コレクション（構造と複数のフィールド）です。

取り込み用ドキュメントタイプを作成するには：

- 1 図で示すようにドキュメントフィールドをドラッグアンドドロップします。



必要なフィールドのみを選択します。

- 2 ドキュメントタイプの生成用に選択された要素のみが右のコラムに表示されます。

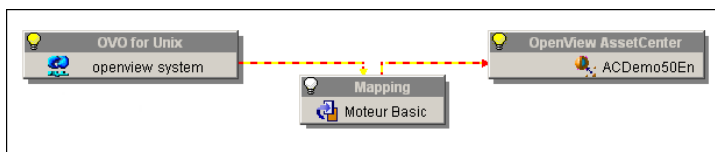
- 3 ドキュメントタイプの生成を検証します。選択されたコネクタの**Document types**タブに表示されます。

▶ **Connect-It** – 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「生成用または取り込み用ドキュメントタイプの定義」

ドキュメントタイプのマッピングの定義

マッピングでは以下の項目を記述します。

- 1 ソースコネクタとターゲットコネクタとの間のリレーション
- 2 ソースコネクタによって生成されるドキュメントタイプと、ターゲットコネクタによって取り込まれるドキュメントタイプとのリレーション



マッピングを作成するには：

- 1 マッピングボックスを選択します。
- 2 **Mappings**タブを選択します。
- 3 **New mapping**をクリックします。



- 4 ソースドキュメントにマップするドキュメントタイプを選択します。



- 5 検証を行います。
mapping editウィンドウが表示されます。
▶ **Connect-It** - 『ユーザガイド』 「ドキュメントタイプのマッピングの定義」
「マッピングの編集」

マッピングの編集

マッピング自体は、ソースドキュメントとターゲットドキュメントの要素の包括的な関連付けです。

これらの要素はmapping editウィンドウに表示されます。



ソース要素をドラッグしてターゲット要素にドロップすることでリンクを作成することができます。

マッピングが作成されると、**Mapping script**フィールドに表示されるスクリプトによって、ソーステーブルとターゲットテーブルの要素間のリレーションが定義されます。

マッピングは検証を行った後（**OK**ボタン）で保存されます。

照合更新キー

レコードを固有に識別して、整合の取れた状態でデータを挿入したり、更新したりするために、照合更新キーが設定されています。キーの色は赤です。



注意:

更新キーはすべてのコネクタで利用できるわけではなく、使用されているコネクタタイプに依存します。

▶ **Connect-It** – 『ユーザガイド』 「ドキュメントのマッピングの定義」 「照合更新キー」

管理モニタの定義

モニタが起動して、コネクタからの情報の転送を管理します。

モニタは、シナリオが作成され、別のシナリオと関連付けられたときに利用可能になります。

モニタの利用目的：

- セッションの処理結果の表示
- セッションアクティビティの記録
- セッションの処理情報の取り出し
- シナリオの処理時にバックアップを行う対象の定義


- シナリオの処理結果の保存場所と保存期間の定義
- シナリオの処理結果の送信先の定義
- ▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」

4 シナリオの起動

複数のシナリオコンポーネントが定義され、設定されるとシナリオを実行することが出来ます。シナリオが実行されるとデータがソースとターゲットアプリケーションの間で交換されます。

シナリオの起動

グラフィカルモードで、ドキュメントの生成、取り込みが行われている場合、シナリオを起動するには次のアクションを行う必要があります。

- 1 ソースコネクタを起動します。
- 2 をクリックします。

コマンドラインによるシナリオの起動


ほとんどのインスタンスにおいて、シナリオの起動にはグラフィカルインターフェイスではなくコマンドラインを使用します。パフォーマンスコストが低く、速度も早いからです。本番環境では主にコマンドラインが使用されますが、シナリオの作成、更新、デバッグ用のツールとしてグラフィカルインターフェイスを使用することも選択肢として残されています。

スケジューラの起動

スケジューラはシナリオと関連付けることができます。正確には、シナリオを構成する生成用ドキュメントタイプと関連付けることができます。

▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「スケジュールの作成」

グラフィカルモードでスケジュールと関連付けられているシナリオをスタートするには、次のアクションを行う必要があります。

- 1 ソースコネクタを選択します。
- 2  をクリックします。

Windowsサービスとしてシナリオを起動

Windowsサービスもシナリオと関連付けることが出来ます。

このサービスにより、バックグラウンドタスクとして**Connect-It**サーバでデータ処理の手順がスタートします。これはシナリオに関連付けられたスケジューラに基づいて行われます。

すべてのサービスは**Service Console**により管理されています。

Connect-Itサービスを起動するには：

- 1 HP\ **Connect-It**プログラムグループの**Service Console**を選択します。
- ▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「**Connect-It**サービスの定義(Windows 環境)」

Webコンソールでシナリオを起動

Webコンソールは、一連の**Connect-It**サービスを管理するのに主に使用されています。

Webコンソールは、**Connect-It**をインストールした後にインストールすることができます。

Webインタフェースにアクセスするには：

- 1 **Internet**ブラウザを開いて、下記のアドレスを入力します。

`http://<サーバアドレス>:<サーバポート番号>/<.war fileの名前>`

例：

`http://localhost:8080/ovcit`

サービスを起動するには：

- 1 チェックボックスで起動するサービスを選択します。
 - 2 **Start** または **Stop** をクリックします。
- ▶ Connect-It – 『ユーザガイド』 「統合シナリオの管理」 「Connect-It Webの使用」

5 シナリオの追跡

処理情報など、コネクタによって処理されたすべてのデータは、Connect-Itのログファイル（アプリケーションログ、ドキュメントログ）に保存されるか、アプリケーションデータベース上に格納されます。

ログの使用

ドキュメントログを使用するとソースコネクタによって生成されたドキュメントの処理中に問題がおきていないかを確認することが出来ます。

Scenario builderは次の2つのログを生成します。

- Connect-Itログ
- ドキュメントログ

ログをアクティブにするには：

- 1 **Monitors/ Configure monitors**メニュー項目を選択します。
- 2 **Display sessions**タブで、オプションを選択します。

アプリケーションログに表示される要素は、オプションで設定することが出来ます。

- 3 **Session backups**タブで、オプションを選択します。

このタブで利用可能なオプションでは、保存される情報にフィルタを適用し、バックアップ（ファイル、データベース）のフォーマットを指定します。

処理エラーで生成される要素のみを保存することをお勧めします。これ以外の要素も保存すると、アプリケーションのパフォーマンスに影響を与える可能性があります。

▶ **Connect-It**—『ユーザガイド』「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」


シナリオのデバッグ

本番モードで使用する前にシナリオの改善を行うには、いくつかのアプローチが考えられます。

- テストモードを有効にする
- **Connect-It**ログを表示し、解析を行う
- 保存されたセッション
- 統計を解析する
- デバッグモードで生成する
- フィードバックループ

テストモードを有効にする

このモードでは、処理エラーが発生した際にターゲットがトランザクションをサポートしていれば、データを挿入しないか、もしくはロールバックを実行することを選択できます。テストモードの動作は、使用しているコネクタによって異なります。例えば、XMLタイプのコネクタでは、データが書き込まれる前にテストモードが停止します。

シナリオをテストするには、をクリックします。

▶ **Connect-It**—『ユーザガイド』「統合シナリオの管理」 「統合シナリオのテストとデバッグ」

Connect-Itログを表示し、解析を行う

ログは、それぞれのシナリオコンポーネントでどのようにドキュメントを処理されたかについての全般的な情報を提供します。

▶ **Connect-It**—『ユーザガイド』「統合シナリオの管理」 「統合シナリオのテストとデバッグ」

保存されたセッション

セッションとは、処理されたシナリオに関連する一連の情報をさします。これには、次のようなものが含まれます。

- アプリケーションログ
 - ステータスによってフィルタをかけられ、あらかじめ定義された場所（ファイルやデータベース）に保管されたドキュメント
 - 処理統計
- ▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」

統計

次のような統計が生成されます。

- 次のような統計が生成されます。
 - **Time statistics** : セッションの長さ、コネクタによる処理の長さ
- これらの統計はシナリオ内のキーとなる要素（ドキュメントの挿入、削除、更新）をハイライトします。
- ▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオのインプリメンテーション」 「管理モニタの定義」 「セッションオプション」

デバッグモードで生成する

ソフトウェアの開発者に使用されるデバッガのように、それぞれのマッピングスクリプトを生成テストの間に、アプリケーションのデバッガで分析することが可能です。

デバッガは各マッピングスクリプトで使用できます。



フィードバックループ

各コネクタは、取り込んだドキュメントの処理レポートを生成できます。

フィードバックループは、ウィザードで作成できます。ドキュメントの処理の追跡とプロアクティブなエラー管理ポリシーを実行できます。

- ▶ **Connect-It**- 『ユーザガイド』 「統合シナリオの管理」 「統合シナリオのテストとデバッグ」 「処理レポート」

索引

コンポーネント, 13
シナリオ, 13
 起動, 21
 要素, 15
スケジューリング, 22
ソースコネクタ, 13
ターゲットコネクタ, 14
マッピング
 作成, 17
 編集, 17
マッピングボックス, 14
モニタ, 18
取り込み用ドキュメントタイプ, 16
生成用ドキュメントタイプ, 15

W

Webコンソール, 22
Windowsサービス, 22

